

今の世の中、いつ何が起こっても不思議でないといわれるが、まさか、わが身に降りかかるうとは、思いもよらないことであつた。

私が赴任した松山は、正岡子規、夏目漱石や秋山好古・真之兄弟など、中学校や高校の教科書でよく目にした人々が生まれたり、活躍したゆかりの地である。

131年前にこの地で女性教育の重要性を唱え、たった2人の女子生徒を対象に松山女学校が誕生した。これが松山東雲学園の前身である。ちなみに、生誕150周年を迎えた漱石の「坊っちゃん」に登場するマドンナは、松山女学校に在籍した遠田ステであるといわれている。

縁もゆかりもなかったその学園の理事長に、私は2015年4月に就任した。青天の霹靂とは、このようなことをいうのであろうか。当然のことながら、理事長の経験などはない。無謀にも引き受けてしまったが、これも生来のチャレンジ

新米理事長のお国自慢



精神がなせる業といつてしまえば、それまでである。先行きが思いやられるのは仕方のないことである。

私の住む大阪から、飛行機に乗ればわずか40分なのに、文化やものの考え方は、こうも違うものかと思ひ知ることになった。大阪で物を買うときに「値切り交渉」は当たり前で、むしろその会話を楽しむ文化がある。

一方、松山では「ハシタナイ」ということになるそうだ。人々は純朴で、親切で優しい性格の人が沢山いる。こんな異文化の中で経営の舵取りをしなければならぬのも、理事長の仕事なのかもしれない。加えて、東雲の教育理念は、キリスト教の精神に基づき「新しき世の鑑となる女性」の育成を目指している。下世話な常識が通用しにくい雰囲気があり、それが原因か否かは分からないが、ご多分にもれず、地方にある小規模学園の財政的困窮は目を覆うばかりで、大変頭の

痛いところである。

しかし、世の中はよくできたもので、どんなに多忙であっても、心労が重なっても、それを癒してくれる何かがあるのが地方の良さである。ここ松山は、周囲を海と山に囲まれている。3000年の歴史を持ち、日本最古の温泉といわれ、女性が一人で行ってみたい温泉ナンバーワンに選ばれた道後温泉や、ストレスが溜まると出かけて行って釣りを楽しむこともできる伊予の海がある。お年寄りが、松山はワンコイン（餌代とジュースで500円）で一日、時間がつぶせる所だと教えてくれる。これが気に入り、月に1〜2度、波止場で釣糸を垂れている。健康にいい上に、安上がり。悩み多い理事長にも、これくらいの贅沢が許されているのではないだろうか。

本学園では、週に1回、チャペルアワーがあり、理事長も年に1回は話をしなければならぬ。私はクリスチャンではな

小西 靖洋 ● 学校法人松山東雲学園理事長

いので、毎回話す題材探しに苦勞をしている。幸いにも、愛媛には「念ずれば、花ひらく」で有名な坂村真民という詩人がいた。この真民さんの詩は、まことに心にしみる人生訓とともに、懐かしさ、優しさを思い起こさせてくれる。これまで、「小さなおしえ」、「本気」や「人間作り」といった作品を学生に紹介してきた。今回も、真民さんの詩「うしろを向かないで」の一部を紹介して、私の責務を果たすことにしたいと思う。

時計の針がいつときも休まず

前へ前へとすすむように

夢をもつて生きよう

うしろを向かない波や風

彼等はわたしの仲間

私の同志

（詩集『花ひらく 心ひらく 道ひらく』から）

私も前を向いて地方の小規模学園の経営の舵取りに専念し、教育の発展に少しでも寄与したいと思う毎日である。